「神殿から商人を追い出す」　2023年10月18日

それから、イエスは神殿の境内に入り、商売人たちを追い出し始め、彼らに言われた。「こう書いてある。『私の家は、祈りの家となる。』ところが、あなたがたはそれを強盗の巣にした。」毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長たち、律法学者たち、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、どうしてよいか分からなかった。民衆が皆、イエスの話に熱心に聞き入っていたからである。（ルカ19：45～48）

主イエスは子ろばに乗ってエルサレムに入られた。この日から苦難を負い、十字架の死に至る「受難週」が始まる。主イエスは神殿の境内に来られた。神殿はヘロデ大王によって建てられた荘厳な大寺院であった。ローマに支配されている屈辱感を、ユダヤ人はその荘厳な神殿を誇りにして晴らし、魂の拠り所としていた。神殿の一番外側は「異邦人の庭」と言われ、ユダヤ教に改宗した異邦人が入ることができた。その内側は「婦人の庭」でユダヤ人の女性が入ることができ、その内側が「イスラエル人の庭」でユダヤ人の男性が入ることができた。その内側が「祭司の庭」で祭司がここまで入れた。一番奥まった所に「至聖所」があり、年に一度、大祭司が入り、民と自分の罪の赦しを願う祭儀を行った。神殿は民族、性別、職業によって境界が設けられ、差別される構造になっていた。「婦人の庭」に商売人たちがいた。彼らの商売は「お土産」を売る商売ではなく、参拝者が利用する二つの商売であった。一つは両替屋である。異教の国から参拝に来るユダヤ人（ディアスポラ）は、神殿への献金はユダヤの貨幣でなければならないため、持ってきた貨幣を両替しなければならない。もう一つは、神殿に献げる羊や鳩を売る店である。いけにえにする動物は、神殿の外より15倍の値段がついており、清められた、ここの店で買わなければならないと規定されていた。両替屋も途方もない手数料を取っていた。巡礼者たちは不満を覚えながらも、神殿の規定に従わざるを得なかった。ところが主イエスは、これらの商人たちを暴力的に追い出し、「こう書いてある。『私の家は、祈りの家となる。』ところが、あなたがたはそれを強盗の巣にした」と言われた。エルサレム神殿は神への祈りの家であるが、あなたがたは強盗の巣にしたと、悪質な商売を厳しく批判したのである。

これらの商売人たちがいた場所は「アンナス広場」と言われていた。当時の最高権力者大祭司はカイアファであった。アンナスはカイアファの岳父で、彼が事実上の権力者で、言わば「黒幕」であった訳である。権力を維持するためには経済力が必要である。「アンナス広場」から揚がる利益で、権力を保持していたのである。主イエスは、神殿が、金銭を参拝者からむさぼり取り、意のままに支配する堕落した構造を見透かしておられた。主イエスはそれを、「強盗の巣」と批判したのである。

この事件は「宮清め」と言われている。主イエスの行ったアンナス広場での宮清めで、神殿当局が悔い改めることなどはなかった。彼らは逆に、自分たちが支配する神殿で暴力的に抗議され、メンツが丸つぶれにされたことに激怒した。祭司長、律法学者、民の指導者・長老たちは、主イエスを何としても殺そうと謀った。しかし、民衆は皆、主イエスの行った宮清めに溜飲を降ろしていた。そして、主イエスの話に真実があると、喜んで聞き入っていた。神殿当局は、民衆の主イエスへの支持と尊敬によって、手出しをすることができないでいたが、主イエスへの殺害の意思は動かないものになっていった。